

ラス懇談会で、それぞれのお母さんから出産の時の話をうかがい、母親になる感動を分けてもらったように思います。そして毎日と共にしていた子どもたちの姿を浮かべ、誕生の瞬間を重ね、その間のお母さん方の育てていらしたという事実が、とても重みのあるように感じました。それから特に、自分はどんな出産をし母になるのだらうと、楽しみにになりました。

話は前後しますが、幼稚園に奉職する以前に、身籠る前に退職をしようと決めていました。私の母が保育者として仕事をしながら私を育ててくれたこともあり、自分が仕事と育児をどうするか、と学生の時迷い続けました。仕事をしたい、というより、仕事をしなければならぬ、と考えがちだったことも迷いを長引かせたのかも知れません。でもその迷いは、大好きで尊敬している二人の大先輩の言葉で解決されました。

卒業式の前日、卒業の報告とお別れの挨拶をしに行った時に次のような言葉を戴きました。『結婚もして子どもも産みなさい。子どもを産んで、育児のために職場を

辞めることになっても、あなたの保育の道が途切れてしまふことにはならない。ずっと続いていくものです。

『長い間、熱心に幼児教育に取り組まれている先生からの言葉だけに意外でしたが、辞めても大丈夫という解放感と安心を胸に、仕事を始められたのでした。

もう一つは、何気ない雑談中の思い出話です。保育を共にし、横に在るだけで嬉しい気持ちになる先輩が、初めてお子さんを身籠った途端、当時手伝っていた幼稚園の滑り台から降りられなくなってしまった、という内容でした。とても印象深く、滑り台から降りられない先生の姿とともに忘れられない話になったのでした。

子どもができるかどうかかわからないうちに幼稚園を辞めましたが、四年という短い期間でも、満足した気持ちでいられました。

病院を決めるまで

妊娠したのでは、という期待の一方で、先ず私を悩ませたのは病院選びでした。産む病院で最初から検診を受

けた方がいい、という思いがあったために、早く病院を決めたかったです。

母子同室であること、生まれてすぐにおなかの上のせられること、母乳が出ていなくても、すぐに乳を含ませられること、座産ができること。これらが、出産に際しての私の希望でした。

病院に関しては、何の予備知識もなく明るい気持ちでいるのが赤ちゃんにも良いとわかっていながら、もっと良く調べておけばよかった、と悔やんだりもしました。

希望が通らないことがはつきりわかっていましたが、早く妊娠を確認したかったので、夫の会社関係の病院を訪ねました。この病院で出産するかどうか尋ねられ、看護婦さんに全てを話しました。その看護婦さんも出産の経験者で、私の話に賛同し、心あたりのある助産院の案内書をくださったたり、もう少し体が落ち着いたら本屋さんに行つて病院のリストが載っている本があるのでは、と一緒に考えてくださいました。

勝手な判断で、ラマーズ法で産める施設なら可能性が

あると思い、リストの中から通院が比較的楽そうな病院に電話で問い合わせしてみました。ある病院では忙しい中、丁寧に私の話を聞き、こだわりすぎない方がいい、とアドバイスをくださった先生もありました。他の病院に問い合わせる前に、この病院なら確実に希望が叶う所があったのですが、住まいから少々遠いので諦めることにしました。

ベビー用品の会社や、マタニティ雑誌の電話相談にも問い合わせをしました。なかなか具体的な資料はないようで、相談員の方から、希望する病院があったら教えて欲しい、と逆に頼まれたこともありました。

結局は、実家のすぐ近くの母の同級生で産婦人科医をしている方が、私の望みをほぼ叶えてくださるということで、里帰り出産をすることになり、ほんの十日程のことですが私にとっては長い病院探しの期間を終えたのです。

うれしい日

「妊娠です」と言われた時は胸が熱くなって泣きそうになったにもかかわらず、病院も決まらず、つわりもあり、気分が晴れない日が続いていました。たまたま、私の友人にも、夫の友人にも、流産した方が比較的多く、本当に生まれてくるのか自信も持てないでいました。

私が幼稚園で担任したYちゃんのお母さんは、ご実家も近く、二年前に出産なさっていたので病院のことをよく知っていらっしやると思い、電話をしました。明るい笑い声と共に、何ヶ月、という言葉で、Yちゃんに私の妊娠のことがわかり、歓声も聞こえてきました。

残念ながら出産する病院は決まりませんでした。Yちゃんもお母さんもとでも喜んでくださり、明るい気持ちで受話器を置きました。その直後、そのお母さんから電話がかかってきました。Yちゃんが、電話の横に置いていった一枚の手紙を読まずにはいられないと電話をしてくださったのです。

せんせいに あかちゃんができて ほんとうにおめでとうございます。

かみさまにおねがいしていたことが かなえられました。

こんどのかみさまへのおねがいは せんせいとあかちゃんが なかよくできることです。

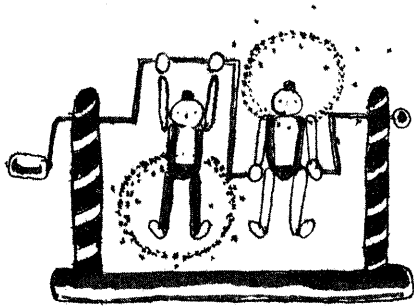
そして、まわりには赤ちゃんの絵がたくさん描いてあったそうです。卒園して一年近くの間、Yちゃんが私のことを神様に願ってしてくれたことを初めて知り、驚き、喜び、すぐには言葉が出ませんでした。私が赤ちゃんと仲良くできる、ということとは絶対生まれてくるんだ、とこの時に確信できました。受話器をお母さんの手から少しの間とってしまえば、すぐに話もできたのが、一枚の紙に祈りを込めて書いてくれ、何も言わずに電話の横に置いていったYちゃんの気持ちに有難く、不思議な力が私の中にはいつてきて赤ちゃんを守ってくれてい

るような気持ちにもなりました。

たくさんのお祝い物

赤ちゃんが身近にいたり、妊娠すれば、当然知ることなのでしようが、知らなかったことを知るとは、楽しいことでした。そしてそれは、出産や育児に関しての小さな不安を消していってくれるものでした。

保健所や病院での母親学級や、その他のマタニティスクールに十回程参加し、そのつど新しいことを知りまし



た。

爪を切ることに不安がありました。唇のすぐ下を押すと、赤ちゃんがよく眠っているかどうかわかるので、その時に切ればよいことを知り、早く爪を切ってみたいと思うようになりました。

入浴に対しても、赤ちゃんの生活のリズムを考えると、夕方までには入れてあげたいと思っていたので、母親がひとりで行われる方法を習った日は、足取りも軽くウキウキして家路につきました。

カルシウムを効率よくとる方法は歯の衛生についての講座の日、夫婦が仲良くすることが子どもの非行を防ぐ、という話ともなりました。

また、出産の一部始終を撮ったビデオも見ました。子宮口が開き、赤ちゃんの頭が見え、顔、肩、からだ、足と出てくるのを見て、他の受講生の方々と、涙ぐんだこともありました。自分の出産も見られないし、大きな驚きでしたが、知らないことからくる不安はなくなりました。

中には同じことに関して、全く反対の方法をとらえ方

を言われましたが、育児の情報のあやふやさなどを考えさせられ、これも大きな収穫になりました。

担任していたTくんのお母さんは、「胎話」の新聞の切り抜きを持ってきてくださいました。ある産婦人科医の指導で、簡単な道具を使っておなかの中の赤ちゃんに語りかけるといふものでした。四人の子どもの育児中のTくんのお母さんは「私も これをやってあげたかった。絶対いいと思います」と笑顔で手渡され、気にかけてくださっていることに心から感謝し、この記事を参考にし、「胎話」の道具をありあわせの材料で作ってみました。

近所に住むYさんは、私が今の社宅に引っ越して間もない時、ゴミ置場の掃除のことでいろいろ教えてくださった方です。近くのスーパーで、そのYさんから「もしかして、おめでた？」と声をかけられた時はYさんの声がとても弾んでいて、思わず「ええ、とても嬉しくて」とはつきりと応えていました。買物袋を下げ家へ戻る間も、喜びがどんどん膨んでいくのを感じていまし

た。

社宅のすぐ上の階に住んでいるHさんは、ご自身の出産の十日後に訪ねてくださり、自分はさぼって、しまつてつらかったから、呼吸法、妊婦体操、乳房と乳首の手入れをしつかりやっておくようにアドバイスをくださいました。看護婦であるHさんの出産直後の言葉は重みがあり、真剣に行うようになりました。

妊娠を確認しに行く前日、たまたま電話をしてくれた弟に「調子がよくないけれど、つわりかもしれない」と言うと、翌日、もぐさ、お線香、漢方の本を持って来てくれました。漢方医学を勉強中で、鍼灸師の資格を持っている弟は、つわりを治すお灸を教えてくれて夕食の用意もしてくれました。

実家の母は観音様へ行き安産祈願をしてくれました。いただいたきた安産守の袋の中には、安産御守、腹帯守、ろうそく、お餌、お米などがいっていました。七五三のお宮参りもしたことがないのに、と苦笑しながらも安産御守を財布の中に入れ、お餌とお米も数日後、い

つものご飯にたきこんでいただきました。

父の日に、欲しい物を尋ねると「元氣な孫」とひと言だけでした。「安上がりね」と笑いながら嬉しくて、それ以上何も言えず、電話を切りました。

夫の母も、三十年近く前の、夫がおなかにいた時の話や、夫がどんな赤ちゃんだったかを話してくれ、マタニティウェアを作ってくれています。父もたまに見る私の姿をからかいながら体のことを心配してくれ、病院の予約など、抜けることの多い私たち夫婦を見守っていられます。

ひとりひとりの言葉が贈り物に思え、ひとつひとつをおなかの赤ちゃんに伝えながら「よかったね、よかったね」と一緒に喜んでいきます。この子が育つために全ての力が集まってきていると思ってしまうこともありました。

三人での穏やかな日々

もともと私以上に子どもが好きな夫ですので、赤ちゃん

んができたことを知って大喜びでした。「わからないことがあったら聞くといい」と、産婦人科医の親友を家に呼び、「初めてあいつが役に立った」と冗談を言って笑っていました。

私が胎動を感じ始めた頃は、夫が手をのせるとピタッと止まり、「僕じゃだめなんだ」とがっかりしていました。それが約一ヶ月後夫が夜中に帰宅した時に、目が覚めた私と一緒にポコポコ動き始めました。「自分の声が赤ちゃんにわかって動いているのだろうと思うと嬉しい」と泣きそうでした。それからは朝晩のあいさつや出勤のあいさつを、おなかに手をあてています。まだおなかの中にいますが三人家族になったつもりでいます。

私の体調が良くなってからは、休日ごとに夫と外出するようにになりました。季節の花々を見たり、野鳥や動物にも会いに行きました。ふだんの買物も以前より遠くへ歩くようにし、いちょうのはっぱがまだ小さいね、へびいちごがまっかね、まだタンポポがさいているのね、と

道端の見逃してしまいそうな些細なことも私の目にとび込んでくる感じです。勿論まだ赤ちゃんには外の景色は見えませんが、私の目を通して、そして心を通して見て欲しいと願っています。

今住んでいる住宅は古いつくりで、和式のトイレであり間取りも狭いことに不満を持っていましたが、和式のトイレが安産につながると思えたり、狭くてもその分掃除が早くできてたくさん遊んであげられる、と思えるようになっていきます。

少し気分がすぐれない時でも、おなかの中の赤ちゃんに絵本を読んだりあげたり、歌ったりしていると元気になってきます。隣の寺院の建て替えて、これから一年四ヶ月の間工事が続くそうです。すでに取り壊しのためにかなり大きな騒音に悩まされています。イライラするころともありますが、赤ちゃんには朗らかなお母さんが一番いい、と思いなおし「イライラしてごめんね、だいじょうぶよ」とおなかに手をあてて謝ります。赤ちゃんがいるお陰で、毎日が穏やかにになり、心もきれいになってい

るように思えます。

幼稚園に勤めている時は、子どもたちの横にいられることがとても嬉しく、心も優しくなれるような時間をすごしていました。そして今、自分の中に存在している命とともにいて、同じような感じを持っています。身が二つになって今のままの気持ちでいられるのか、もしかしたらガミガミお母さんになっていたりもするのでしょうか。穏やかにすごす日々の中では、やはりそれも「楽しみ」になってしまいます。

